

翻刻『女敵討記念文箱』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-08-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武蔵野大学文学部日本文学文化学科 近世読本作品の翻刻・公開プロジェクト班 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/617

翻刻『女敵討記念文箱』

おんなかたきうちかたみのふみばこ

武蔵野大学文学部日本文学文化学科

近世読本作品の翻刻・公開プロジェクト班

平成二十七年参加学生

洪 瑞希、長野桃子、坂本幸恵、丸田優紀、荒山由沙、川上実紗、小竹日奈子、今あかね

平成二十八年参加学生

坂本幸恵、丸田優紀、荒山由沙、小竹日奈子、今あかね、木村友香、鈴木彩香、室井優菜

指導教員 三浦一朗

はじめに

武蔵野大学文学部日本文学文化学科の授業「日本文学文化研究調査実習」の一環として、「近世読本作品の翻刻・公開プロジェクト」(指導教員 三浦一朗)に平成二十七・二十八年参加した学生が、読本『女敵討記念文箱』(底本は国立国会図書館蔵本、請求番号

148164)の翻刻を行った。

『女敵討記念文箱』(中本三卷一冊)は天明二年(一七八二)三月刊、板元は江戸・中山清七。作者未詳。本編の題材に関して、享保九年(一七二四)四月、江戸松平周防守邸内で側女みちが局沢野の草履を履き違えたことから沢野に侮辱され、これを恥じ憤って自害、みちの下女さつが沢野を討って主の無念を晴らしたという一件

が、「草履打意趣松田敵討」として『一話一言』巻五十
一に見える。みちが本編の「道芝」に、局沢野が「ゑび
ら」に、下女さつが「夏」に当たり、「道芝」「夏」は名
も近い。『月堂見聞集』巻十五にも享保八年三月のこと
としてほぼ同旨の記述が見えるが、こちらは人物名が異
なる。『一話一言』や『月堂見聞集』に言うところが事
実だという保証はないが、同じ一件をより詳しく描い
た『女敵討松田系図』（明和七年（一七七〇）序）など
の実録もあり、少なくとも巷間に流布していた話題と考
えられる。本編はこれを題材とする。また本編は、草履
打ちを趣向とすることから、同じ一件を題材とする容楊
黛作・天明二年初演の浄瑠璃『加々見山旧錦絵』の好評
を受けての刊行と考えられる（『日本古典文学大辞典
第一巻』『鏡山物』の項（中村幸彦執筆））。ただし、浄
瑠璃からの影響は確かでも、より実録に近い作品である
（横山邦治『読本の研究』（風間書房、一九七四年）、二
三〇～二三一ページ）。過渡期の読本にあつて様々な試
行錯誤の場となつた中本型読本のうち、容楊黛作『敵討
連理橋』（二巻一冊、安永十年（一七八二）刊）に次ぐ

最初期の作品であることに加えて、寛政五年の改題後印
本『鏡山実録松田女敵討』刊行が翌六年刊『いろは醉故
伝』の成立に関わる可能性が指摘される（木越俊介「上
総屋利兵衛の読本出版」、『江戸大坂の出版流通と読本・
人情本』（清文堂、二〇一三年）、二七～二九ページ）な
ど、文学史上に一定の意義を認められるが、これまで未
翻刻であつた。以下にその翻刻を掲載する。翻刻掲載の
許可を頂いた国立国会図書館に感謝申し上げる。（三浦
一朗）

《凡例》

・読みやすさを考慮して、翻刻では適宜平仮名に漢字を
当て、句読点や濁点を補う。なお、漢字は原則として
現在通行の字体を用いる。

・平仮名に漢字を当てた場合、原文の平仮名をルビで示
し、原文を復元できるようにする。また、これと区別
するために、原文にある振り仮名は丸括弧（ ）に入
れて示す。これら以外に新たに振り仮名を加えること
はしない。

例

原文通り

むかしよりいまにいたるまで腹をたつて利を得たるものなく

本翻刻での表記

昔より今に至るまで腹を立つて利を得たるものなく

・ 形容詞の連用形や連体形の活用語尾に「敷」の字を当てて「しく」「しき」と読ませる場合があるが、これは仮名に開いてそれぞれ「しく」「しき」と表記する。同様に、接続助詞「とも」「ども」に「共」を、「とて」に「逆」を当てることがあるが、これも仮名に開いて「とも」「ども」「とて」と表記する。これらの場合、原文での表記を振り仮名で示す。

・ 合字は相当する仮名に開く。

・ 右の他、明らかな誤字や当て字と判断される場合は適切な字に直すのを原則とするが、文意をつかめない場合や複数の可能性が想定される場合など、一部原文のまま残すこともある。

・ 誤字や当て字を直した場合、原文の表記を振り仮名か注記で示し、原文を復元できるようにする。

・ 明らかに脱字と思われる箇所には、前後から推測して適切な文字を（ ）内に入れて補う。

・ 踊り字（「ゝ」「ゞ」「々」「ゝ」「く」など）は該当する仮名や漢字を当てて翻刻する。ただし、漢字の繰返して現行の表記でも踊り字を用いるのが一般的な場合（人々、時々など）には「々」を用いる。

・ 会話文、心内語には鍵括弧「」を付ける。

・ 仮名遣いや漢字の送り仮名については原文のままとし、歴史的仮名遣いに合わせて改めたり、統一したりすることはしない。

・ 原文に改行は少ないが、読みやすさを考慮して適宜改行し、段落を設ける。

・ 本文中に古歌や故事などの引用がある場合、参考として引用後の（ ）内に出典を注記する。

《付記》

本翻刻は、本学で開講する「日本文学文化研究調査実

習」の一環として、冒頭に氏名を挙げた学生有志が輪読形式で作成した原稿に基づく。最後に科目の担当教員として三浦が全体を確認し、右の凡例に沿った表記の統一を行った。



【図1】

見返し 局糸びらが女中道芝を草履で打つ。

【翻刻】
女敵討記念文箱

序

人の命は水の流のごとし。義を顕して其名の残る事、
(ばんたい) 万代までも尽きず。昔より今に至るまで腹を立てて利を



【図2】

序1ウ・序2オの挿絵 政子の無聊を慰めるために
女中道芝が御前で琴を弾く。

得たるものなく、害を求めたる人その数を知らず。千丈
(つひみあり) の堤も蟻の一ツ穴より破るるといふ。たしなむべきは腹
だち也。むべなるかな、(序1オ)(序1ウ・序2オ)に挿
絵(図2)あり 仏の「腹たつものは修羅の地獄に墮
(お)つ」と教へ給ふ。しかりといへども、武将の喜怒をもつ

て万人を治め給ふ事は、意味深長の事有りて鈍筆に表しがたし。此巻を見る人よくよく鑑みて、あらあら見る事なかれ。

天明二年三月吉日(序2ウ)

※図2の書き入れの文言

(局、御前へ詰める)

(奥方、鶯の初音を聞き、道芝に琴を調べさせ、御慰みある)(序1ウ)

(あやきぬ、御前へ出、御機嫌伺ひ)

(道芝、琴を調べる)(序2オ)

女敵討記念文箱 上之巻

頃(けんきう)は建久四年、右大将頼朝公、駿州富士の裾野の御狩にて御発駕有り。御留守のかためは大江の廣元、是を承る。折も五月の夕晴れに、木々の梢もみどりして、一ト際目だつ御所女中、頼朝公御留守と政子御前のつれづれを慰め、かしづき奉る。御局は所司の別当梶原が妻

ゑびら、(1オ)多くの女中の上に立ち、大老職を鼻にかけ、政子御前の耳ねぶり、夫に劣らぬげぢげ姿。そのくせ短気、気短く、あまたの女中に無理をいひ、叱りちらすぞ恐ろしき。

かくて政子の御方のたまひけるは、「我が君御留守といひ、ことには朦々しき五月の空、折よくも今日の晴間一声告げしほとぎすも、我君の御帰りを知らせのおとづれ(1ウ)ならんと心も浮き立つ、自らが思ひやるかなし。道芝を呼び寄せて琴を一ツ曲調べさせ、なをなを興を催さん」と仰せこと有ければ、腰元立上がり、「道芝様召します。お次の衆、呼び継がれよ。」といひければ、お次、お茶の間、中居まで、「召します、召します。」と声々に呼び伝ふ。

爰に畠山重忠が秘蔵娘、糸竹の道、歌の道、何暗からぬ道芝とて(2オ)年も二八の恋ざかり、娘ざかりの花の顔、雪とあざむく白妙の卯の花がさね桂姿、御前はるかに控へける。局のゑびら声高に、「是は是は、いつともいつとも御召しのたびごとに遅なはり、いかに御前の御気に入じやとて、きつめ持たせぶり。なんば

う御台様の御数奇になされて御詞のかかる道芝殿なればとて、うち捨て置ては(2ウ)奥を政道する此ゑびらが顔が立たぬ。」とさも苦々しいひければ、道芝は女子気のはつとばかり、一言のいらへなくさし俯て居たりける時に、仁田四郎が妻あやきぬ進み出て申は、「御大老のゑびら様の御詞をもどくには候はねども、何しに道芝さんにさやうな心がござりませう。大方髪しまふていさんしたのでござりませう。」と取成せば、政子御前もあやきぬが言葉に(3オ)すがり給ひ、「それぞれ、アノ内気な道芝、なんのそのやふな心有るもので。局ゑびら一ト通りの理はもつとも。頼朝公の御留守なれば皆々仲よふしてたもれ。」と仰の言葉に、皆々もはつと平伏なしければ、ゑびら、御前に手をつかへ、「夕風激しく候へば、奥へ御入遊ばされ、十種香などしかるべし。」と申上ければ、あまたの女中もさわめきて、「それは一トしほ御慰み。(3ウ)いざさせ給へ。」と勧め申せば、政子御前も皆々にかしづかれ、奥の一間へ入給ふ。跡には道芝黙然として居たりしが、やや有つて奥を見やり、「いつに変わらぬゑびら様の憎らしひ言葉、胸をさ

すつてこらへるも、大切な御奉公の身なればこそ。何事も思ふまひ。さらば御前へ上らん。」と奥へ行かんとする所に、廊下の方よりゑびらが端、用有りげに駆け(4オ)来たり、道芝が袂をひかへ言ひけるは、「申々、道芝様、是に御出なされますか、御前を御尋ね申しました。」と言ふに、道芝、不審顔にて、「わしを尋ねたと言ふは、何ぞ用でも有るか。」と言ふに、懷より文を取り出し道芝が手に渡し、「此御文は源太様よりひそかに御前へあげてくれよとお頼み遊ばしました故、御目にかけます。此文の御返事を(4ウ)お待ちなさるとの御口上でござりました。」と言ひ捨てて帰りける。道芝は「合点ゆかず。」と文押し開き、見てあれば、さもいやしき文言にて恋慕の文。見るより道芝、下へ投げ捨て、「いづぞやから自らに心をかけて、折々の文玉梓、見るも中々汚らはしひ。」と奥へ行かんとせしが、心付、「いやいや此やうな淫らな文、爰に捨て置いてひよつと人目に(5オ)かかりては、思ひもよらぬ悪名をたてられんもいかななり。」と、捨てたる文を取り上げて懷中し、奥へ行かんとせし所を、庭の切戸に立聞して居たるゑび

ら、声をかけて立出、「道芝の不義者、待て。」と言ひければ、道芝大に驚き、振り返り、「此道芝を不義者とは、何をもつておつしやるぞ。」と言へば、ゑびらは声を荒らげて、「何をもつてとは（５ウ）まさまじしひ。そなたの懐の文を。」と言ふて、手ごめにして取出し、「弟源太と不義の密通、殊に源太は妻の有る男、主の有る男に恋するは未来までの罪と聞く。殊には御家の政道が違ふ。内々にては捨て置がたけれども、重忠殿の息女、又弟源太が事なれば堪忍して穩便に済ませふが、主有男に恋したる（６オ）、道に背きしそのもと、此場で済まして御前へ沙汰なしにするかわり、そなたのやうな畜生同然の女に、刀の棟打も汚らはしければ、幸ひここにあり合せた成敗の鞭、よつく魂にこたへて、已後をきつとたしなみや。」と、庭にあり合ふ草履おつ取り、道芝が背中も折れよと打擲す。道芝は（６ウ）せきのぼせ、ゑびらに向かひ、既にかふよと見へければ、ゑびら、道芝が体を見て、「是は何ンじや、大老のわしに向かひ腹立ちそふなその顔。サア手向かひすらばしてみや。」と、すり寄り押し寄せる憎体を、道芝は無念の涙おしつ積み、

さし俯て居たりけり。ゑびら、重ねて言ひけるは、「上たるわしに手向かひはなるまひ。畢竟自らがやうなる（７オ）仏性なるもの故に、今日のしだらは助けてやる。命の親じやと思はれよ。」と、悪口たらたら言ひ捨てて奥の方へと入にける。

跡に道芝立ち留まり、草履で打たれし残念を晴らさんとは思へども、「奉公の身の上。」と氣を取り直し、せき来る涙おし拭ひ、さあらぬ体にてすすごと、おのが部屋にぞ帰りける、心の内ぞ（７ウ）いぢらしき。

扱も局ゑびらは邪智深くして、道芝が政子御前の御氣に入をねたみ、かりそめの事にて女の有るまじき草履にて道芝を打擲せし事、奥女中口々の噂有りて、ゑびらを誹らぬ者一人もなかりけり。かくて常々道芝に召し使わるる夏といふ女有りけるが、（８オ）実心の者にて、道芝が様子ほのかに聞しかども、知らぬ体にもてなし、道芝が心を慰めんと、銚子・盃を手にもち出て道芝に向かひて申は、「もはや今宵は御召しもござりますまひ。たまたまの御休息なれば、御酒一つお勧め申さふと存じまして、御肴も調へました。サア一つ。」と勧めける。葵

れきつたる道芝も、しば(8ウ)む心を取なをし、「さりとては、そなたは信実な者じや。わづか一、二年のうちの勤めなれども、年端もゆかぬ自らをいとしがり、優しふしたるものは、身に余りて忝い。そなたの志の此酒、今宵は一つ飲んで、自らも浮き世の憂さを晴らさん。そなたも一つ過ごしたも。」と言ひければ、夏は会釈して、「是(9オ)は是は、勿体ない御言葉。何の私が御目にとまるやうな御奉公ぶりも致さぬに、御褒めの御挨拶に却つて傷み入まする。まづ御盆召し上られよ。」と銚子を取れば、道芝も嬉しげに一つ乾して夏に差し、「サア一つ飲みやいの。」と言ひければ、夏も盃をおし頂き、酒を飲み、「憚りながら差し上ん。」と言ふを、道芝(9ウ)押さへて、「今一つ乾したも。」と言いつつ、箆箭の内より黒繻子の帯に、浅葱縮緬に金糸縫ひの模様の小袖取り出して、夏が側に置いて言ひけるは、「酒一つ押さへた故、是を肴にやるほどに、快く吞でたも。」と言ふに、夏はびつくりし、「御前、是は何遊はしまする。大切な小袖を御肴にとは勿体(10オ)なひ。マア納めて御置きなされませい。」と辞退すれば、道芝重

ねて言ひけるは、「是は疾ふからそなたにやるふと思ふて居たれども、折あらばと思ひしが、今宵は主従ただ二人しみじみと楽しみ、嬉しきの余り思ひ出してやります。善は急げといふ事も有り。殊に人の命はいつ何時、どんな事があるやら知(10ウ)れぬもの。老少不定の世の習ひ、やりたひ物を留め置いて、ひよつと自らが瘡でも起こつて死たれば残り惜しひ。早ふそつちへ取つてたもれ。」と言ふに、夏はおし頂き、「御心に入られ、何の御用にも立たぬ私へ此品々、有がたふ存じますれども、余り冥加が恐ろしふ御座りまする。又、折もござりませふ。マア御預け申(11オ)たひ。」と、おし頂きて戻しければ、道芝重ねて「今言ふ通り、人の身の上、明日をも知らぬ露の命。やりたひ物やらぬ内は心に懸かる。憎ふて物がやられふか。それともに、わしが志を無にしやるか。」と言ひければ、夏はひれ伏し、「それ程までに思召すを申受けぬは、又御心に逆らふなれば。」とおし頂き、「それはそふと御前(11ウ)様も、御二人の親御様御揃なされて御出遊はすに、今のやうな疎ましひ、命が有るの無ひのと、かりそめにもそのやうな

事仰ります。御前ばかりの寿でもなし。御二親様の寿でござりまする。」と言ひければ、道芝も心嬉しげに「よふ氣を付てたもつたぞ。只親たちが大切じや。」とせきくる涙おし包み、心で泣て居たり(12才)けり。夏は紛らし、「こんな話は氣が詰まつて悪ひ。わつさりとも一つ上ッてお休み遊しませ。又明日のお勤めが大事じや。」と、かりそめながら忠信の心ぞ言葉に表はるる。道芝、夏に諫められ、「本にそふじや。わしも寝よふ。そなたも休みや。」と言ひければ、「さよふならば、御機嫌よふ御静まり遊ばせ。」と主従二人、奥と口(12ウ)引別れてぞ臥しにける。

かくて夜もしんしんと更ければ、道芝は密かに起き出で、夏が寝い姿をよくよく窺ひ見て、枕元の料紙取り出し、筆取り上て書く文字の、三ツ四ツ五ツ、双葉より育てられたる二親へ名残の文と書流す、涙の露の命毛も、今日限りとする墨の、硯の海の海山を、書きかかりては又涙、くり(13才)返し巻返し、思ひのたけを書き述ぶる、女子心ぞあわれ也。やや有ッて文箱取り出、中に入れ、手箱を出し、袱紗に包み側に添へ置き、

こぼるる涙もろともに泣き寝入りにぞ臥しにける。「夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいつこ」(古今集)・一六六)と詠ぜしごとく、はや明渡る、其月もはや西山に傾けば、道芝は奥の一間へ夏を呼び寄せ、「そなたは(13ウ)今から梅が谷の親方へ行でたもれ。この文箱と此文庫、御目にかかつてお渡し申て下されや。委細は文に書て有る故、口上には及ばぬ。何じややら、此頃は御二人様が懐かしふて、会ひましたふてならなんだ。早う行んでたもれ。」と言ひければ、夏は早速身ごしらへして、「しからは、参つて参じませふ。少しの間、お寂しからふが待て(14才)御出なされませ。」と、立ち出るを、名残惜しげに「コレ夏」と呼び返し、「もふ行きやるか」と涙まじりに問ひければ、夏は何の氣もつかず、「つい行んで参ります」と言ひければ、道芝はうちしほれ「そんならさらば」と言ふ貌を、夏はつくづく打眺め、「此御子とした事が、御前の御使に御里へ参り、今の間に帰りまするものを、もふ会はぬものか何ぞ(14ウ)のやうに「さらばや」と、どふか別れを悲しく思し召すやうな御詞。早ふ急ひで帰りませふ。」と言ひ捨

てて、夏は里へと走り行。

道芝は夏が後ろ影見へぬ迄送り、一間の内へ入り、「あらうたてや。今を此世の別れとも知らで出行くはかなさよ。さぞあの文を親たちの見給はば嘆き給はん。悲しや。」と声をもたてず忍び泣き。理せめて哀(あわれ) (15才)なり。かくて心を取直し、身繕いし、「かくまで覚悟を極めし上からは、名残惜しむも未練也。もし人に見とがめられては、思ひ込んだる甲斐もなし。早々最期を急がんと。」と、用意の小袖を着し、左の手に水晶の数珠を持ち、右の手に九寸五分の守り刀をしつかと持、西に向かひて合掌し、「南無西方弥陀如来 本(15才)願誓ひましまさば、父母一つ蓮へ救ひ取りたぎ給へ。南無阿弥陀仏。」ともろともに、咽に突き立て、潔く終にはかなく成りにけり。惜しや、二八の花盛り、一十陣の風に散り行く身の果ては、哀れとも又いちらしき。

かくて腰元夏は、梅ヶ谷の親里へ行かりしが、殊の外胸騒ぎしければ、道芝がゑびらとの様子思ひ出す(16才)に付ても、先へ先へと急げども、心は後へ引かされて、一足も歩まれねば、しばし佇、思案をし、「夕べ道

芝様のお小袖を下されし時、世の中の無常を觀じ、色々心に懸かる事のみ仰つたが、氣に懸かつて今に忘れられず。殊に内を出る時の様子といひ、彼は以て不審千万。一トまづ館へ取返し、貴方のお顔を見て安堵し(16才)た上、お里へ行くが上々の分別。」と直ぐさま館へ取つて返し、見れども変はりし事もなし。間の襖を押し開けて見れば、道芝は刃に伏し、朱に染みたる死骸を見るより、「是は」と仰天せしが、心を鎮め、胸撫で下ろし、息を継ぎ、道芝が亡骸に取りすがり、「是もうし道芝様、聞へませぬ。かほど迄思ひつめら(れ)し事ならば、なぜ(17才)にかくなりとも私へ御所存を御明かしなされて下されぬ。御前はかくなり給ひ、それで能ひと思し召さふが、女なれども御家来といふて付添ひまするは私一人。御二人の親御様へ何と申訳致しませふ。荒ひ風にも当てまじと、年月かしづき参らせし心遣ひも水の泡。変わり果てしお姿。」と恨みつ泣く身を悶へ、しばし(17才)涙に沈みける。しばらく有つてすつくと居直り、きつと心を取り直し、「爰にてわしが狼狽へて、吠へ面下げて悲しんでは、大事の御主の命も無に

なる。犬死にさせましても無念の上の恥辱。この上生
 きながらへて居たればとて人間の甲斐はなひ。コレ道芝
 様、魂魄有らばお聞なさんせ。疾くにも私に此様子を
 話し（18才）なされて下さらば、仕様もやうも有るべき
 に、騙して使ひにやらしやんして、一人憂き目を見ます
 ぞや。恨みは最早後の事。されども私此所へ帰りしか
 らは、御前に犬死はさせませぬ。翌とも言わず今宵の
 内、御前の敵ゑびら殿を引つ捕らへ、理非明白に糺せし
 上、その座を引かせず、一ト太刀なりとも打て（18ウ）
 本望達し、修羅の妄執晴らせませう。草葉の陰にて悦
 び給へ」と甲斐甲斐しくも身づくろひ。側なる刀隠し
 持、ゑびらが部屋へ窺ひ行く。

女敵討記念文箱上巻終（19才）

女敵討記念文箱 中之巻

花誘ふ鐘の響きも入相時、夏は密かにゑびらの局が部
 屋へ行に、腰をかがめ手をつかへ、「恐れながら、ゑび
 ら様へ御直に申上ます。わたくしは道芝が召使ひでこ

ざりますが、いかが致しましたやら急に悶絶仕り、息
 も致さず取り詰めました。恐れながら、御覧の上、御薬
 頂戴致したひ。」とさめざめ（19ウ）と申にぞ、ゑびら
 聞て、「それは気の毒。自らが行て見よふ。」と、腰元引
 連れ駆け来り。夏は先に立、一ト間の襖押し開けば、ゑ
 びらは内へ入りけるを、夏はすかさず飛かかり、胸づ
 くしきつと取ル。ゑびら驚き、振り放さんとする所を、
 動かせもせず、声荒らげ、「是、老ひばれ殿、能ふも能
 ふも御主人に覚へも無ひ不義の咎を言ひ掛け、草（20
 才）履を以て叩いたな。あれ見さんせ。三郎の随一と
 も呼ばるる重忠が娘、草履で打たれて、人の交はりな
 らぬとて、此やうに死なしやつた。是は誰故。さしあ
 たる主人の敵思ひ知れ。」と、無二無三にとつて突き伏
 せ乗りかかり、隠し持たる九寸五分にて胸元を刺し通
 す。此物音に腰元、端、「アレ、ゑびら様を切つた。」と
 右往左往に（20ウ）逃げ惑ふ。奥中一面騒ぎ立、上を下
 へとかへしける。

かくて御留主かための大江廣元、刀引下げ駆け来る。
 続ひて江馬の小四郎義時、兩人此体を見て驚きしが、

「様子いかが。」と尋らる。夏は両士の前に手をつかへ、「私事は夏と申て、道芝が召使でござりまするが、此ゑびら様故に道芝は自害致し相果てました。女ながらもさしあたる主人の(21才)敵うち捨て難く、ゑびら様をすかし寄、恐れながら御恨みを申上ましてござりまする。かく本望を遂げます上からは、此身はずだすだに成りまして御恨みとは存じませぬ。御作法に行ひ下さるべし。」と、潔くこそ申しける時に、大江廣元聞き給ひ、「主人の仇と有からは、討たて叶はぬ当の敵。殊に女の身を以て神妙成る(21才)致し方。それがし頼朝公の御留主を預り奉れば、子細有り体に申べし。」と有ければ、江馬小四郎申さるるは、「いかなる意趣をもつてゑびら害せしぞ。まつた、主人道芝自害の様子、一々つまず申べし」と有れば、夏は「仰無ふても申上ずに居ませふや。一々つぶさに恐れながら申上ます。今日すなはち道芝が使ひにて梅が谷の館へ参る途中にて、頻りに(22才)胸騒ぎ致し、それ故道芝が身の上氣遣はしく、立ち歸りましたる所に、かくの如くの仕合。道芝自害の訳と申は、昨日御前より御召しにて上り、其夜下り候て、何

やらん疎々しき体に見へ候故、様々物語の内、思ひよらず源太様より道芝へ御艷書をたまはりしを不義者也と無体に言ひ立、草履をもつて打擲され、武士の娘として(22才)相立ちがたくと思ひ詰め、自害致せしに紛れこれなく候。殊に、両親への文も御座候。また、私へ形見の小袖、それと申さずくれ置候へば、紛ひもなく無実の悪名、無念の自害と存じ候故、女ながらも主人の敵ゑびら様を討ち止め申候。すなはちは是が親里へ送り候文にて候。」と、文箱を差し出す。廣元詳しく聞届け、「幸ひの此文箱。此内にこそ(23才)道芝が心の丈を込めつらん。只今是以て披見せば、事の様子も猶明白。それ見給へ。」と差し出さるれば、義時封を押し切つて読み上げる其文に、

「文して申上参らせ候。いよいよ御機嫌よく御座遊し候とぬしく存参らせ候。しかれば、私事、何とも一分立ちがたき事御座候て、自害致し申候。その訳も申上げた候へども、細々(23才)申上げ候ては一入御嘆きも増し候はんと差し控へ参らせ候。それとなく、夕べ夏には物語致し置候まま、御聞遊し下されべく候。幼少より

御養育の段、ありがたく存じ参らせ候。今日まで御恩も送らず、孝行も致し申さず、これのみ草葉の陰にて心掛かりに御座候。何事も前の世の約束事と御諦め、御嘆き下されまじく候。此上はさかさま事(24才)ながら、仏果の種ともなり候様に御回向なされ下されべく候。わけて申上げ参らせ候。此手箱のうちに入置参らせ候道具のうち、鏡一面、是は朝夕御前へ上がりしたたびごとに私顔かたち映し参らせ候まま、亡き後にても私へ御会ひなさると思し召、御覧下されべく候やうにと差し上げ申候。重安様へは政子様より拝領致し申し候(24ウ)御香箱差し上げられ下されべく候。妹へは簪、挿し櫛遣し申候。成人の後、姉を思ひ出し候様にと遣され下されべく候。又、此紙人は封のまま歌橋の乳母に遣し候。幼きより愛おしみ、守り立てくれ候まま、さぞかし嘆き候はんと、今見るやうに思はれ参らせ候。夏事はかやうの事とは夢にも存じ申さず。此文御読み遊し候はば、さぞさぞ(25才)驚き候はんと存じ参らせ候。此年月、懇ろに勞りくれ候まま、よくよく仰られ下されべく候。いつまで書候ても尽きぬ御名残と、御暇乞ばかりと申残し

参らせ候。不孝のものとて、御父さまの御叱り遊し候はんと存参らせ候。幾重にも幾重にも御詫遊ばし下され候へかし。思ひもうけし事ながら、今際に成り候て、涙にかき暮れ後先の文字もしどろに(25ウ)見へ分かず候まま、あらあら申上げ参らせ候。かしく

と読みければ、有合ふ人々顔見合せ、暫し涙を催しける。廣元、義時に向かひて、「かくのごとく道芝が自筆の文に書表したれば、夏が申に偽りなし。ゑびらが邪智より事起こり、道芝に悪名付け、草履を以て打擲と云ひ、かたがた以て大老に似合ざる致し方。かく事明白たる上は、ゑびらが死骸(26才)は平三へ相渡し、道芝が亡骸は御寺へ営み葬るべし。」と、即時に畠山、梶原へ使者を相立られ、よしなに葬送致べしとの事也。

かかる所へ、奥よりも仁田四郎が妻あやきぬ、広盞に桂、小袖を載せ、恭しく持ち出て、「御台所の御上意。」と呼ばはれば、皆々はつと頭を下げ、敬ひ平伏なしにけり。続きぬ申は、「御前の上意には、」局ゑびらが妬みにより、(26ウ)道芝に無実の咎を負おせ、草履を以て打たれしを、女ながらも武士道を立ての自害、

天晴れ、重忠が娘也。」との御褒美の御詞。また召使ひ夏とやらん、下々には稀なる忠義の女。主人の仇をたち所に打たる働き、御感まし、思し召もこれ有れども、頼朝公御留守の事なれば、まづまづ当座の御褒美に御小袖下し置かるる。頂戴有りてしかるべし。」(27才)と差し出せば、夏は天へも上りし心地、冥加至極と推し頂き、三拜九拜なしにける。有合う人々勇み立ち、「武勇は正しく石龍婦人(『隋書』卷八十一「列女伝」、忠義は晋の予讓(『史記』卷八十六「刺客列伝」)にも劣らぬ譽れ。」と称美にて、廣元、義時は立給ふ。

女敵討記念文箱中ノ終(27ウ)

女敵討記念文箱下之巻

かくて程なく頼朝公御帰館まし、此度の始終聞召わけられ、梶原、畠山両家を召し、廣元を以て仰渡さるるは、「ゑびら事、奥第一の重役、殊に年老ながら理不尽なる致し方より事起こり、下女夏に害せられたり。夏事は主の敵故、局を害し候事なれば、已後夏に對し意恨

残すべからず。」又、畠山へは、「道芝(28才) 自害の事、局ゑびらに雑言の上、草履にて打擲され、一分立難きとて自害したるを、下女夏当の敵を討ち取たり。道芝よりの文、詮議のため内見し、君にも「侍の子たるものかくこそあるべけれ」と御感也」とて、文箱相渡され、「道芝手道具も残らず引取申され候へ」と仰渡さる。又、夏が親、桐ヶ谷の郷士、松田助八を召呼ばれ、「夏事、主人自害の上、(28ウ) その刀にて局を害し候に付、尽く吟味を遂ぐる所、道芝ゑびらに意趣有りといへども遂ぐる事あたはず、侍の面目を存じ、自害に及ぶに付、当の仇ゑびらを討取たる所明白、証拠有りて詮議相済みたり。女の身にて即座に敵を討ちし段、神妙也。さりながら、大老に對し又者の身分として我まなる致し方に付、夏は其方へ預け遣(29才) さる。又、ゑびらが種類共、夏に對し已後遺恨無きの段、口上書取り置、其方へ下さるる。」と仰渡さるれば、助八はつと平伏し、夏を受け取、よみがへりたる心地して宿所へ伴ひ帰りける。しかる所へ、大江廣元より内意の書状に、「此度、夏事、天晴れる致し方。よき武士の手本也。其許にもさ

ぞ喜びなるべし。君にも思し召有る事なれば、(29ウ) しばらく相待るべし。追つて御沙汰有べし。」との文体。助八は有りがたく、御内意の段ありがたく承知仕候由、返事し遣しける。玆翌日になり、早々に重忠忍びやかに助八方へ尋ね来れば、助八夫婦肝を消し、「かかるあばら屋へ勿体なき御入来。」と申に、夏は聞付、走出、見るよりわつと泣出し、「殿様、さぞ道芝様がお懐かしう御座りませふ。(30オ) 私もお懐かしふてお懐かしふて、夜の目も合わず、物もろくろく食へませぬ。」と、声も惜します泣き沈む。重忠も悲嘆の涙にくれ給ひしが、助八に向ひ、「初めて来り、侍の未練な体と恥入申た。娘事も病死と違ひ、名字に疵の付く事と無念の自害致たは、介錯して殺した同前。一方ならず不憫にごさる。今日参りしは、娘が敵を討し夏へ一礼も申たし。(30ウ) それのみならず、其許へ願ひ有り。何とぞ夏を某へ下さるべし。死したる娘が蘇りしとはかり、老の力に致したし。其許も大事の娘くれ召さるるは迷惑ならんが、ひとへに頼み存る。」と聞て、助八、「冥加なや。御望みとあるからは差し上申さん。しかしながら暫く返事御待願ひ

奉る。子細は、昨日廣元公より御内意の書状に、「上にも思召も有り」との事。殊に娘とは(31オ) 申ながら御預り申置候事。此一埒の相済むまで、何とも御答申上難し。」と聞て、重忠、「尤也。其訳も存ておるが、先々貴殿の御納得有べくや内々に聞たきまま、夏への礼も申がてら尋参つた。ひとへに聞入給はれ。」と申さるれば、助八、「何が玆、右の一埒相済み次第、如何様とも御意次第。」と申に、重忠も安堵し給ひ、「まづもつて忝し。是より御寺へ参り道芝へも吹聴(31ウ) せば、草葉の陰にてもさこそ喜び申や。」と、重忠は帰り給ふ。かくて廣元より、又々内意に、「先達の一埒、いよいよ吉左右也。明日御使参るべし。罷出候様に。」と申来れば、翌日早々助八罷出る。廣元、義時をはじめおの列座にて、「先達て其方へ預置所の娘夏事、一ト器量有るものなれば、中老に召し遣ひたしとの御意也。承知なるやいかが。」と有れば、助八は(32オ) 額を疊に擦り付、「上意の趣、有りがたく畏まり候。しかしながら賤しき拙者風情の娘、結構なる御大役仰せ付らるるは憚り入候。」と申ければ、義時、「一ト通の卑下は尤也。御前

